

二〇一三年二月二日

着膨れてダルマのごとき幼やかな  
満員の子供列車や里の春  
身じろがぬ鹿の睫毛に風花す  
賑へるワンワンランド四温晴  
雀どちはしやぐや春の潦  
十七度予報に迷ふコートかな  
夢殿の参道綴るしだれ梅

つくし  
小袖  
さつき  
よし女  
せいじ  
満天  
ともえ

二〇一三年二月一日

熊よけの鈴鳴らし行く里山路  
もとほれば臘梅匂ふ茶庭かな  
窯口の火に一服す炭焼き男  
公園のあちこち工事春隣  
黒ぼこの畝うつすらと下萌ゆる  
雪片にたちまち滲む句帳の字  
車座に無縁仏や洞ぬくし  
大師像海に向きたる遍路道  
糸寒天己が身透かせ乾きけり  
賽の目を写楽が睨む絵双六

英子  
せいじ  
雅流  
ひかり  
さつき  
さつき  
うつき  
なつき  
うつき  
よし子

二〇一三年一月三十一日

測量士四温の畦に地図広げ  
苔庭の光となりて風花す  
里山の日に打ち展べて寒天干す

よし女  
さつき  
うつき

大冬木洞に在します地藏尊  
春兆すダム湖の水の漲りて  
膝さすりつつ語りあふ日向ぼこ  
寒天干す雫の刻む音幽か  
うそ寒き国会中継見飽きけり  
覗きたる洞に地藏や里の春

小袖  
よし子  
さつき  
有香  
満天  
よし子

二〇一三年一月三〇日

白波のごと日に反るは寒天田  
炭小屋の主に句帳覗かるる  
行者どち馳す大寒の奈落道  
手水舎のタオルは真白風光る  
寒肥す猫の額の畑なれど  
校門の左右に阿吽の雪だるま  
雪雲の帽子を被く伯耆富士  
潮風に恋の絵馬鳴る四温かな  
天日を弾くは谷戸の寒天田  
水鏡分けゆく水脈は陣の鴨

うつき  
有香  
百合  
つくし  
よし女  
かかし  
英子  
なつき  
よし子  
よし子

二〇一三年一月二十九日

将棋子ら集ふや東風の四阿に  
日を弾く寒天干しの田一枚  
吾に媚びて寄る野良猫と日向ぼこ  
平凡がなにより幸春炬燵  
輝の手の甲に静脈浮き上がる

治男  
うつき  
よし子  
あさこ  
宏虎

銀箔を散らすごとくに千鳥翔つ  
竹人形生る工房の春灯  
ここもまた間歩の蹟らし山眠る  
一句碑にこころ通へば温かし  
煌々として有明の寒の月  
二〇一三年一月二八日

春を待つ寶頭盧さんを撫ぜもして  
タイヤ痕なき晨朝の深雪道  
寒明けを曆に印し鋤手入れ  
足踏みのごと新雪の道進む  
せせらぎに凹むは猪のぬた場らし  
菜の花のひと茹で膳の華となる  
昨夜雪に里山の景白変す

二〇一三年一月二七日

病室のベッドに間遠虎落笛  
降る雪に繭ごもりなる月円か  
焼山を見よ万葉の火が走る  
雪降ると見るまに庭の白変す  
旅の地図ルーペで探る春炬燵  
唄ひつつ下校の子等や春隣  
からふじて崖に留まる朴落葉  
窯出でて湯気だるまなる炭あるじ  
明けやらぬブラットホーム冴返る

よし女  
雅流  
菜々  
百合  
満天

ぼんこ  
こすもす  
かかし  
あさこ  
菜々  
満天  
かかし

ぼんこ  
はく子  
ともえ  
わかば  
あさこ  
あさこ  
うつぎ  
かかし  
わかば

船頭のガイドに和む炬燵船  
枯葦の風の形に倒れ伏す  
一願をこめて地藏に寒の水  
深更の一郷照らす寒の月  
寒肥のスコップ阻む太根かな  
探梅行旧家の庭も覗かるる  
里山のせせらぎ春を奏でけり  
ごうごうと音立てて山焼かれけり

英子  
さつき  
有香  
三刀  
宏虎  
雅流  
菜々  
ともえ

毎日句会みのる選・二〇一三年二月四日